【252】

氏名（国籍）	崔（ちぇ）　京姫（ぎょんひ）（韓　国）
学位の種類	博　士（心　理　学）
学位記番号	博　乙　第　1540　号
学位授与年月日	平成11年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	中学・高校生における感情表出の制御に関する研究
主　査	筑波大学教授　教育学博士　新井　邦二郎
副　査	筑波大学教授　教育学博士　杉原　一昭
副　査	筑波大学助教授　教育学博士　桜井　茂男
副　査	筑波大学助教授　博士（心理学）　庄司　一子

論文の内容の要旨

1．論文の目的

本論文は，その人間関係が希薄になっている中学・高校生の青年を対象に，感情表出の制御の程度を測定する尺度を作成するとともに，青年期の友人関係に関して感情表出の制御がもつ意味を内的・社会的適応感という観点から解明することを目的とする。

2．論文の概要

本論文は，文献的研究および11の調査的研究から構成されている。

研究1，2は，感情表出の制御を測定する尺度の構成とその信頼性・妥当性の検証である。その結果，21項目からなる尺度を構成し，さらに因子分析の結果，5つの下位尺度（「八方美人的制御」「非仲間志向的制御」「自己抑圧的制御」「同調のための抑制的制御」「同調のための強調的制御」）を見い出した。研究3は，中学生・高校生の感情表出の制御の学年的変化を調べた。以下，研究4～11の研究で得られた知見について概観する。

(1) 感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係について

これまで，感情表出の制御についての一般的認識は好ましい社会的スキルであるというポジティブな面が強調されて考えられたため，個人の内面の精神的健康および社会生活や他者との関係における適応感・満足感といったような個人内の心理的適応面からの実証的研究が見あたらない。

研究4から研究8まで，感情表出の制御と内的・社会的適応感との関連について検討した結果，感情表出の制御を多く行うことは自尊感情，ストレス，キレ衝動および友人関係の満足感において望ましくないことが明らかにされた。また，充実感と学校適応との関係においては，感情表出の制御の種類によって異なる結果が得られたが，男子は「同調のための感情表出の制御」を多く行うことによって，充実感を感じるのに対し，女子は自分の感情を抑制せずに表すことによって，充実感を感じるという結果が得られ，友人関係のどのようなところで「生活の楽しさ」を感じるかについての性差が明らかになった。学校生活類型と感情表出の制御との関係においては，学校生活の適応型は「八方美人的制御」を除いて他の群より感情表出の制御を少なく行うことが明らかにされた。問題行動念慮との関係においては，「自己抑圧的制御」を除いて，全体的に感情表出の制御を中ぐらい行う生徒がそうでない生徒より問題行動を起こしたいと思うことが少ないという結果であった。自我同一性との関連におい

ては，感情表出の制御を多く行うことが自我同一性において望ましくないことが明らかになった。

(2) 感情表出の制御を及ぼす性格特性と対人態度タイプについて

どうして感情表出の制御を多く行うのか，どういう性格をもっている人が感情表出の制御を多く行うのかについて，研究9で実証的研究を行った。その結果，「対人関係の未熟さ・服従的・シャイ」な性格のover controlarは抑制的制御と[非仲間志向的制御」を多く行い，「攻撃的・短気・外向的」な性格のunder controlarは「同調のための強調的制御」のように友人に同調するために怒りやイライラを強めて表すことが明らかになった。

また，研究10で，感情表出の制御と対人態度タイプとの関係を検討した結果，LH群（親和欲求：低，シャイネス：高）の方がHL群（親和動欲求：高，シャイネス：低）より感情表出の制御を多く行うことが明らかになった。特に，「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」においては，HH群（親和欲求：高，シャイネス：高）もLH群と同様に，HL群より感情表出の制御を多く行うことが明らかになった。これらの結果の中でLH群の方がHL群より感情表出の制御を多く行うという結果は，対人関係が苦手な最近の青年が機械文明の発達で友達と一緒にいなくても退屈しないし，友人との関係において密接な関わりより，表面的で摩擦を起こさないような接し方を好み，感情表出の制御を多く行うという理解と符合している。また，「八方美人的制御」および「非仲間志向的制御」において感情表出の制御を行う青年の中には，親和欲求とシャイネスの両方とも高い人が含まれていた。この「非仲間志向的制御」を多く行う人の中には，友人と一緒にいたいのにそれに対する不安が高い人がいるという結果は，友達にネガティブにばかり接している青年に対する介入の際に，その人が友人関係に対してもっている不合理的な考え方や行動の消極性などについて注目することの有効性を示唆するものと考えられる。

(3) 柔軟性が感情表出の制御と適応感との関係に及ぼす影響について

研究11では，感情表出の制御を多く行う人がみな，内的・社会的不適応感を有するものではなく，感情表出の制御を多く行っても柔軟性の高い人は適応感をもっているのではないかと考え，柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響についての検討を行った。その結果，感情表出の制御を行う人の中でも高い柔軟性をもっている人は，柔軟性の低い人と比べて，内的・社会的適応感の得点が高いことが明らかになった。また，同じ水準の柔軟性の中で，感情表出の制御と適応感との関連においては，感情表出の制御を多く行うことがそうでない群より適応感が低いことが明らかになった。

(4) まとめ

以上の結果を総合すると，いつもあらゆる感情を表出し，表出の制御を全然行わないことがいいというものでなく，自分の精神的健康上また長い目でみた将来の人間関係の形成および維持のためにも，自分の感情をある程度表すことが必要であることが明らかになった。感情表出の制御を多く行っている人は，そういうことを長く続けると，そういうイメージに定着してしまい，ずっと自分が作った架空の人物でいなければならなく，内的適応感を保てなくなるであろう。また，相手の人からみれば，自分が何を言っても傷ついたり，怒っている様子を見せないから，そういう接し方を変えないし，感情表出の制御を多く行う本人は自分の感情を表出しないかぎりずっと嫌な思いをすることになりかねない。当然，友人との関係に疲れてしまい，対人関係自体を避けたくなり，友人との関係形成および関係維持においても望ましくないことが考えられる。ただし感情表出の際，自分の感情を表出する方法やスキルについては工夫が必要であろう。現代の青年はまさしく，物質的豊さと精神的貧困の中に生きている。現代青年に既成世代の価値観をそのまま要求することは適切ではない。感情表出の制御の問題や対人関係回避の一つの解決策として，学校では，感情表出の制御を行う場面において，どのような表現の仕方で自分を主張しながら相手との関係も守れるかについての感情表出スキルを教えることが必要であろう。また，相手の言動によって不愉快であることを表現したり，相手と違う感情を感じているとしても，それが相手を否定したり拒否したりすることにはならないという認識を広げること，そしてそのことを受容し合える社会の雰囲気づくりが望まれる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，中学・高校生の感情表出の制御の心理的側面を解明しようとしたものである。そのなかで，5つの下位尺度からなる感情表出の制御尺度を構成した点，および感情表出の制御の程度と友人関係の満足感や精神的健康，問題行動の念慮などとの関係など，感情表出の制御が青年のさまざまな心理面とどのような関係をもつのかを明らかにした点などが評価される。また，感情の表出を避けて付き合おうとする青年が増えている時代風潮のなかで，本論文の今日的意義が高く評価される。

今後の研究においては，質問紙による調査だけではなく青年の実際の行動との関係づけや感情表出の制御の発生過程の解明，感情表出の制御の男女差や個人別タイプのいっそうの解明，病的な制御と正常な範囲内の制御との区分けの仕方の解明，感情表出の制御に問題をもつ生徒への臨床的介入方法の確立などが，期待される。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。